



2021年10月号

今年は夏から秋へ、急激に季節が移り変わった感じがしました。気温の変動が激しいと体調の維持が難しいですね。さて、オギジビでは8月9日から9月18日まで言語聴覚士(ST)を目指す学生の臨床実習を行いました。皆さまのご協力の元、6週間の実習が無事終わりましたので、お礼を兼ねご報告いたします。



カスタネット通信8月号にも書きましたが、言語聴覚士の養成課程の最終学年では2つの外部施設で12週以上の臨床実習を行うことになっています。今年度、おぎはら耳鼻咽喉科では後期実習期間に実習生を1名受け入れました。大学病院では毎年臨床実習生の指導をしていましたが、おぎはら耳鼻咽喉科では開院以来初めての実習生です。かつ、人工内耳を装着している実習生は大学病院のときを含め、初めてです。そのため、オギジビに通われている方々、スタッフにあらかじめ「聴覚障害」「人工内耳」について理解を深めてもらうために、カスタネット通信4月号から様々なことを発信してきました。今回は半年に渡るビックプロジェクトの集大成として、臨床実習で実習生と私が学んだことをみなさんにお伝えしたいと思います。対話方式でお届けします！

1. 臨床実習の目標

オギジビでの実習開始前、前期の実習で難しさを感じた点を①STの学生として、②聞こえに関連しての2つに分けて考えてもらったところ、「患者さんのみでなく、他職種の方や他のSTのスタッフとの会話、情報交換時や連絡事項の聴き取りが難しいと感じた」という答えでした。そのことを踏まえ、後期の実習では「ミニマイクロホンを活用するなどの工夫を行いながら、積極的にコミュニケーションをとり、自分から情報を得る姿勢を身につけたいと思っている」とお話ししてくれました。



ST

実習を振り返り、積極的なコミュニケーション、情報収集はできましたか？



実習生

おぎはら耳鼻咽喉科の皆様、とても快く協力をしてくださったので、頼みやすかったです。ですが、声をかけるタイミングが分からずミニマイクロホンの使用を頼めなかったことがあり、まだまだ積極的に情報を得る姿勢は身につけていないと感じております。今後の課題の1つです。

私も、毎朝のルーティン作業の時など、ミニマイクロホンを使っていないと気づいても、「まあ、それほど重要な内容ではないからいいか」と思い、使用を促さないことがありました。何が重要かは私が決めることではなく、本人が決めることなのでこれは私の反省点でもあります。自分の聞こえにくさや、積極的な情報収集の大切さの理解が不十分なお子さんに対しては、この部分を丁寧に指導していく必要がありますね。

* ミニマイクロホン：発話者が持つことで、その声が直接人工内耳に送信されます。遠距離・雑音下での会話の聞き取りの向上に役立ちます。



ST

「聴覚障害をもちながらも、言語聴覚士という仕事にどう向き合っていくか考える」という実習目標を立てましたが、達成度合いはどうでしたか？



実習生

実際の臨床の現場で6週間過ごすことで、例えば

- ・ 待合室など少しでも周囲が騒がしくなると聞き取ることが急に難しくなり、声を大きめにしていただかないと聞き取れないこと
- ・ 構音障害のあるお子さんの構音の誤りの聞き分けが正確ではないこと
- ・ お子さんの話が聞き取れないことがある

など、自分の聞こえでは難しいこと、困ることについて、実習前より理解を深めることができました。

また、初めて聴覚障害という経験を活かし、患者様と関わることができました。これは、聴覚障害者と深く関わる言語聴覚士だからこそ、できることなのではないかと思っております。

2. 聞きやすい環境作り ～実習中に感じた3つのこと～

ながら作業の難しさ：これは実習生も私もお互いに、ということです。実習生は大量の説明を聞きながらメモをとることが難しく、私は正しく情報を伝えるためにはパソコン入力をしながらではなく、一旦手を止め、実習生の方に顔を向け話す必要がありました。確実なコミュニケーションを成立させるためには、聞くこと、相手に伝わるように話すことに注力することが重要です。

聞きやすい環境の維持は難しい：実習生がST室より騒音が多い待合室で、あるいは遠距離から話しかけられたがミニマイクロホンは私が持っていた、保護者と実習生がお話している時に子どもも話し始めた、あるいは下の子が泣き出した、など。「ああ、今、聞き取りにくいよね」と思いながらもすぐには対応できないことがありました。

相手の行動をよく見て観察をする：これまでの実習生は「今は無理」という時に話しかけてくるということが多々あったのですが、今回はそれがほとんどありませんでした。相手の動きをジーっと見て観察し、話しかけるタイミングを見ていたのでしょうか。私もよく見るように心がけ、何か話しかけても思ったような反応ではない時は再度繰り返して言ってみました。すると答えが返ってきたりしたので「1回目は聞こえていなかったのだな」ということが分かりました。



ST

聞き取りやすい環境で、聞く・伝えるということを意識的に行うこと、相手をよく観察するということがコミュニケーションにはとても重要だと考えたのですが、これまでの学生生活や臨床実習中にこのようなことを実感したこと、自分で対処したことなどはありますか？



実習生

聞き取りやすい環境の維持に苦労した経験はこれまでもあります。

前期の実習先の病院が、理学療法士や作業療法士も同じ広い部屋でリハビリを行うという環境でした。音が反響してしまったり、周りが騒々しかったりと、聞き取りが難しく苦労しました。学校では授業でグループワークがある際が最も聞き取りが難しかった場面だと感じております。可能ならば、静かな環境への移動や、ミニマイクロホンなどのFMシステムの使用をお願いしておりました。

相手をよく観察することは、実習中に限らず日常生活の中でも、重要であると思っています。私は、会話で聞き落とした情報を補うための手段の1つとして、身振りや表情などを観察しています。

3. 合理的配慮とセルフアドボカシー

合理的配慮とは障害のある人の人権が、障害のない人と同じように保障されるとともに、教育や就業、その他社会生活において平等に参加できるよう、それぞれの障害特性や困りごとに合わせて行われる配慮のことです。クリニックには自分の聞こえについてまだ上手く説明ができないお子さんや、子どもたちの集団生活の場での聞こえに対する配慮について悩む保護者、職場で聞こえにくさを感じている聴覚障害者など、たくさんの方がいらっしゃいます。また、幼稚園・保育園、学校の先生や職場の同僚など、補聴器や人工内耳を装着している人と初めて接する場合、合理的配慮をしようと思っても、何をすればよいか分からない、やりすぎてお節介に思われはしないだろうか、など悩む人も多いのではないかと思います。

一方、**セルフアドボカシーとは**自分に必要なサポートを自分で周りの人に説明して理解してもらおうことです。自分の力を引き出すためにはどのような手段があるか、明確に自身の主張を伝えます。実習生は実習前に以下のことを挙げてくれました。

- ・ ゆっくり大きめの声で話して欲しい
- ・ 呼ばれても気づかないことがあるので、肩を叩くなどしてから話しかけて欲しい
- ・ 人工内耳を装着している右側から話しかけて欲しい
- ・ 周りかぎやかな時、複数人で話すときなど、ミニマイクロホンを使って欲しい
- ・ 患者さんにも私が耳が悪く聞こえにくいことを伝え、可能であればミニマイクロホンを使用させて欲しい



ST

自分の経験も含め、合理的配慮やセルフアドボカシーについてどのように考えますか？



実習生

個人的な考えですが、幼いころはしっかり配慮をし、成長していくにつれセルフアドボカシーができるように促していけるのが理想だと思っております。私がセルフアドボカシーを行うようになったのは、大学に入ってからでしたが、もう少し早くから行うべきだったと思っております。ぜひ反面教師にしてください。

人によって望む合理的配慮は違っていると感じています。なので、セルフアドボカシーを積極的にできるのが理想ですが、私のように他者に迷惑がかかるのではと遠慮してしまい、上手くセルフアドボカシーができない方も多いと思います。ですが、セルフアドボカシーを行わないことで、聞き漏らしてしまい、かえって周囲に迷惑をかけてしまうことが起こり得ます。積極的にセルフアドボカシーを行っていきたいと思っております。

合理的配慮とセルフアドボカシー、両者のバランスが重要ですが、なかなか難しいものですね。

音声による情報を補うために、私は可能な限り予め文字化しておいてそれを渡す、ということをしました。もしかするともう少し音声-文字変換アプリなどを積極的に使用する手もあったかもしれませんが、事前にどのようにして欲しいか、話し合った方が良かったかもしれないと思いました。

4. 臨床実習を終えて

カスタネット通信7月号作成のため、難聴児の保護者の方に実習生に聞きたいことについてアンケートを行いました。皆さん完成した7月号を熟読してくださっていたので、嬉しく思いました。カスタネット通信では伝えきれなかったこと、追加して聞きたいことなどもあったと思いますので、実習中になるべく保護者と実習生がお話しする時間を取るようにしました。成長した人工内耳装用者とゆっくりお話をする機会はなかなかないと思いますので保護者の方々にとって、充実した時間になったのではないのでしょうか。実習生もとても真摯にこたえてくれていたので良かったと思います。実習生は忙しいこともあり、最近は両親とじっくり話す機会が無かったと言っておりましたが、実習中何回か家族と連絡を取って、自分の小さい頃のことを確認してくれたようでした。



ST

今、幼稚園や小学校に通っているお子さんとその家族に会って、どのようなことを感じましたか？



実習生

上にもあるように自分がどんな子ども時代を送ってきたのか、母に聞くことが幾度かありました。そのときに、生まれ持ったものは選べないけれど、これからの生き方については選べるのではないかという話になりました。保護者の方も、お子さんの今後について悩まれている方が多かったように感じます。お子さんのことをしっかり考えているから、悩まれるのだと思います。この先、選択を迫られることがあるかもしれませんが、前向きな気持ちでお子さんとともに乗り越えていってください。もし、良ければ私のおはなしさせていただいた経験を思い出して、参考にしてくだされれば嬉しいです。



ST

6週間の実習は毎日の見学、日誌の記入、レポート作成、予習・復習、最後は実習したことについてまとめて発表ととても大変だったと思います。実習で得たことを教えてください。



実習生

実際の臨床の現場で6週間過ごすことで、一個人として、1人の聴覚障害者として、自身の課題点を抽出することができました。また初めて自分の経験を活かすことができ、誰かの役に立てることの嬉しさを知りました。言語聴覚士の技術を学ぶのみでなく、自分を見つめなおすことができた貴重な機会をくださった皆様には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。6週間大変お世話になりました。ありがとうございました。

今回実習生がお話ししてくれたことは、家族や知り合いに補聴器、人工内耳を装用している方がいる場合、それが子どもであっても大人であっても適切にコミュニケーションを取る上でとても役立つことなのではないかと考えました。私もこれらのことを心に留めて患者さんと接したいと思います。